Osaka University Knowledge Archive

Title	Bhagavatī Ārādhanā が記すdaśa kāmāvasthāḥ
Author(s)	河﨑, 豊
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2014, 48, p. 65-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56605
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Bhagavatī Ārādhanā が記す daśa kāmāvasthāḥ

河 﨑　豊

キーワード：daśa kāmāvasthāḥ／*Bhagavatī Ārādhanā*／Śivārya／不淫の掟

0. はじめに

理想の最期のひとつに断食死を掲げるジャイナ教は、数々の断食死文献を作成した。Śivārya の *Bhagavatī Ārādhanā* [BhĀ] は、その種の諸文献中最大の分量を誇り、同教の断食死研究に欠かせない。しかし批判校訂本はなく、研究も乏しい。Śivārya は1～2世紀頃の人物とされ、これが事実とすれば断食死文献としては最古の部類となるが、この年代考証も BhĀ の厳密な考証を経たとは言い難い。BhĀ の著者問題や後代の付加の有無、断食死文献としての独創性はあるか否か、あるとしてインド思想史上における位置づけは如何か、といった点は、何も分かっていないに等しい。これらを解明するための基礎作業のひとつとして、個別内容を抽出しそれと一致あるいは類似する概念が他の諸文献にも存在するか否かを地道に探索し比較することが不可欠である。本稿は以上の考えに基づく予備調査の一環として、情欲に苛まれる者が経験する10種の衝撃という概念を取り上げる。

1. BhĀ 886-889

BhĀ は断食死次第を諸段階に分けて説く。その過程のひとつに “aṇusaṭṭhi” があるが、これは師僧が修行者の耳元でジャイナ教教義を呟き、末期にその

内容を再確認させるものである。その内、不淫の掟に関わる呟きが 871 詩節から始まり、まず 10 種の非梵行[1] と女を厭う（itthiveragga）5 種のことという 2 つの法数項目を挙げる。後者は 876 詩節によると（1）情欲によって作られた諸過失（2）女によって作られた諸過失（3）不浄性（4）歳を重ねた男に馴染むこと（5）女との交流による諸過失、を指す。[2] そして 1110 詩節まで、これら5項目を詳説するという構成を取る。

さて Śivāryaによれば情欲は毒蛇のようなものであり、「妄想という卵から生まれ、愛憎という一対の動く舌を持ち、感官の対象領域という穴に住み、快感という顔を持ち、憂慮と激怒とを有し、羞恥心という抜け殻と高慢という牙を持ち、多くの苦をもたらす毒を持つ《情欲》という蛇に咬まれると、男たちは力なく消滅する」（884-885[3]）。そしてこの“毒蛇”に咬まれてしまうと、以下のことが起こる：

āsīviseṇa avaruddhassa vi vegā havaṃti satteva /
dasa hoṃti puṇo vegā kāmabhuaṃgāvaruddhassa //886//
paḍhame soyadi vege daṭṭhuṃ taṃ icchade vidiyavege /
ṇissasadi tadiyavege ārŏhadi jaro cautthammi //887//
ḍajjhadi paṃcamavege aṃgaṃ chaṭṭhe ṇa rocade bhattaṃ /
mucchijjadi sattamae ummatto hoi aṭṭhamae //888//
ṇavame ṇa kiṃci jāṇadi dasame pāṇehi muccadi madaṃdho /
saṃkappavaseṇa puṇo vegā tivvā vā maṃdā vā //889//

毒蛇に取り囲まれた者にも丁度 7 つの衝撃が生じる[4] けれども、《情欲》という蛇に取り囲まれた者には10〔の衝撃〕が生じる（886）。①第1の衝撃では憂える。②第 2 の衝撃では人はその〔女〕を見ようと欲する。③第3の衝撃では溜息をつく。④第4〔の衝撃〕では苦悩が登ってくる[5]（887）。⑤第5の衝撃では肢が焼かれる。⑥第6〔の衝撃〕では食事を気に入らない。⑦第 7〔の衝撃〕では失神する。⑧第 8〔の衝撃〕では正気を失う（888）。⑨第 9〔の衝撃〕では何も認識しない。⑩第 10〔の衝

撃〕では〔欲望という〕酔いで目がくらみ諸々の気息に捨てられる（＝死ぬ）。また、妄想の強度に基づいて〔これら〕諸々の衝撃は激しくもあり、あるいは穏やかでもある（889）。

性愛文献や修辞論書に親しんだ者なら、それらが “smaradaśā” や “daśa kāmāvasthāḥ” 等と称し提示する概念と、Śivārya が列挙するこの項目の類似性に気付くのではなかろうか。例えば Vātsyāyana 作 *Kāmasūtra*[6] 第 5 章「人妻」は、人妻への想い断ち難く「己の情欲がある段階（sthāna）から別の段階へ達しつつあるのを見るなら、その時は己の身体を壊すことから護るべく、人妻たちに近づくべし」（5.1.3[7]）と言い、身体の破壊を終局とする 10 段階として①一目惚れ cakṣuḥprīti[8] ②思考の執着 manaḥsaṅga ③妄想の生起 saṃkalpotpatti ④睡眠の断絶 nidrāccheda ⑤やつれ tanutā ⑥感官の諸対象から〔興味が〕離れること viṣayebhyo vyāvṛtti ⑦羞恥心の喪失 lajjāpranāśa ⑧正気を失う unmāda ⑨失神 mūrcchā ⑩死 maraṇa を列挙する（5.1.5）。これと BhĀ の掲げる 10 段階説との類似性は明白である。とはいえ、その内容や起こる順番についてはかなりの相違もあり、単純な影響関係の想定は難しい点も注意する必要がある。

この段階説については Stanley Insler の研究がある[9]。Insler は、性愛文献と修辞論書が同様にこれら十段階を記載しつつも、前者が肉体的影響、後者が精神的変化に重点を置くという相違した一覧を提示することを指摘しつつ、ジャイナ教文献や二大叙事詩、また *Atharvaveda* にも遡って、本来は熱情に打ち負かされた者の特徴的な振る舞いと、愛する者と別離した者の苦しみの特徴を記すという異なる 2 つの組の存在を想定して、ジャイナ教文献は本来存在したであろう熱情に打ち負かされる者の特徴的な振る舞いを示す組の方を正確に伝承してきたとする。Insler に基づけば、非ジャイナ教文献での 10 段階説は以下の如く整理し得る（表 1）：

（表1）非ジャイナ教文献における10段階説

	(a) Alaṅkāra-ś.	(b) Kāma-ś.	(c)*Mahābhārata*[10]	(d) *Rāmāyana*[11]
1	abhilāṣa	cakṣuḥprīti	cintā	cintā
2	cintā	manaḥsaṅga	dhyāna	dhyāna
3	smṛti	saṃkalpa	niḥśvāsa	niḥśvāsa
4	guṇakīrtana	nidrācheda	na śete	śoka
5	udvega	tanutā	kṛśatā	kṛśatā
6	pralāpa	viṣayebhyo vyāvṛtti	śayyāsanabhogeṣu na ratiṃ vindati	prakṣīṇatva[12]
7	unmāda	lajjāpranāśa	pralāpa	vilāpa
8	vyādhi	unmāda	unmāda	
9	jaḍatā	mūrchā	dīnatva	dīnatva
10	maraṇa	maraṇa	ūrdhvadṛṣṭi vivarṇatva	kāla

この一覧と、ジャイナ教文献が示すそれとの比較は INSLER が先鞭をつけたが、彼が指摘したジャイナ教文献の例は 2 つに過ぎない。そこで以下では、最初に彼が提示した 2 つ ― Vimala 作 *Paumacariya* と、Agaḍadatta 説話からの例を示し、次に筆者が見出したジャイナ教文献の諸例を確認する。

2. *Paumacariya* [Pc]

Vimala（2 ～ 5 世紀）作 Pc はジャイナ教版 *Rāmāyana* 諸文献の中でも最初期に位置する作品とされるが、年代は決定し難く、彼の所属する派も ― ジャイナ教が明確に分派する以前の人物かもしれず ― 未決着である[13]：

satta ya havanti vegā bhuyaṅgadaṭṭhassa gāruḍe bhaṇiyā /

dasa ya puṇo savisesā havanti mayaṇāhidaṭṭhassa //15.45//
paḍhamammi havai cintā vege biiyammi icchae daṭṭhuṃ /
taie dīhussāso havai cautthammi jaragahio //15.46//
pañcamavege ḍajjhai chaṭṭhe bhattaṃ visovamaṃ hoi /
sattamayammi palavai aṭṭhamavegammi uggāi //15.47//
navame mucchāvihalo dasame puṇa marai ceva akayattho /
evaṃvihā[14] u vegā kahiyā mayaṇāhidaṭṭhassa //15.48//

そして、蛇に咬まれた者に 7 つの衝撃が生じる〔と〕蛇論典で述べられているけれども、色欲という蛇に咬まれた者には特別な 10〔種の衝撃〕が生じる（45）。①第 1 の衝撃では物思いが生じる。②第 2 の衝撃では見たいと欲する。③第 3〔の衝撃〕では息が長くなる。④第 4〔の衝撃〕では苦悩に捕えられる[15]（46）。⑤第 5 の衝撃では焼かれる。⑥第 6〔の衝撃〕では食事が毒のようになる。⑦第 7〔の衝撃〕では嘆く。⑧第 8 の衝撃では歌いだす[16]（47）。⑨第 9〔の衝撃〕では失神し惑う。また⑩第 10〔の衝撃〕では目的を遂げず死ぬのみ。色欲という蛇に咬まれた者には、一方、かかる類の諸々の衝撃があると語られている（48）。

3. Agaḍadatta 説話中の例

アガダダッタとは白衣派聖典 *Uttarajjhāyā* [Utt] 4.6 への諸註釈が引く逸話の主人公である。この説話を Hermann Jacobi が撰文集に収めた[17] ことで、古くから研究者の注目を集めてきた。尤も、筆者が所有する Utt 諸註釈、[18] 及び同説話を伝える *Vasudevahiṇḍī* を確認した限り、件の 10 段階説は Jacobi 撰文集中の引く 2 つのアガダダッタ説話中、1072 年に著された Nemicandra 註が伝えるそれにのみ存在する。今は Jacobi 撰文集（p.70）から引用する：

nisuṇijjai payaḍam iṇaṃ Bhāraha-Rāmāyaṇesu satthesu /
jaha dasa kāmāvatthā honti phuḍaṃ kāmuyajaṇāṇaṃ //41//

paḍhamā jaṇei cintaṃ bīyāe mahai saṃgamasuhaṃ ti /
dīhuṇhā nīsāsā havanti taiyāe vatthāe //42//
jarayaṃ jaṇai cautthī pancamavatthāe ḍajjhae angaṃ /
na ya bhoyaṇaṃ ca ruccai chaṭṭhāvatthāe kāmissa //43//
sattamiyāe mucchā aṭṭhamavatthāe hoi ummāo /
pāṇāṇa ya saṃdeho navamāvatthāe pattassa //44//
dasamāvatthāe gao kāmi jīveṇa muccae nūṇaṃ /

恋をする人々に 10 種の情欲の諸段階がはっきり生じる、という風に[*Mahā*]*Bhārata* や *Rāmāyana* や諸教典でこのことが明確に伝え聞かれている（41）。①物思いを生むのが第 1〔の段階〕。②第 2〔の段階〕では逢瀬の楽を大いに熱望する。③第 3 の段階では長く熱い諸々の吐息が生じる（42）。④苦悩が生じるのが第 4〔の段階〕。⑤第 5 の段階では肢が焼かれる。⑥恋をする者の第 6 の段階では、食事を楽しまない（43）。⑦第 7〔の段階〕では失神する。⑧第 8 の段階では正気を失う。⑨第 9 の段階に達した者には命の危険がある（44）。⑩第 10 の段階に至った、恋をする者はもはや命を落とす…

4. その他のジャイナ教文献における例

4.1 *Dasaveyāliyanijjutti* [DasN] 260-261 = *Pravacanasāroddhāra* [PSU] 1064-1065

Nijjutti とは白衣派聖典に対する最古の韻文註である。作者は伝統的に Bhadrabāhu とされるが、その年代は 1 世紀から 5 世紀までと研究者によって一定しない。[19] 10 段階説を提示するのはそのうちの DasN である。DasN は、*Dasaveyāliya* 第 6 章が dhammatthakāma なる章題であることを承け、ジャイナ教的視点でそれら trivarga を説明する。そして DasN 259 によると kāma には 24 種あり、それは「得られた saṃpatta」14 種と「得られていない asaṃpatta」10 種に細分され、[20] 後者が DasN260-261 で件の 10 段階説として提示される。DasN 260-261 は後に Nemicandra[21] のジャイナ教教義項目集

PSU 1064-1065 にそのまま引用される。典型的な Nijjutti 的文体で読み辛いが、諸註釈を踏まえて訳すと以下の如くとなろう：

tattha asaṃpatt' atthā cintā taha saddha saṃbharaṇaṃ eva /
vikkavaya lajjanāso pamāya ummāya tabbhāvo //260//
maraṇaṃ ca hoi dasamo ... /
その内、得られていない〔kāma〕とは①希求②物思い③熱望[22] ④想起⑤落胆[23] ⑥羞恥心の消失⑦放逸[24] ⑧正気を失う⑨〔実際にその場に居ないのに〕女が現われている〔かの如く行動する〕[25] ⑩そして 10 番目は死[26] となる…

4.2 *Bṛhatkalpabhāṣya* [BKBh] 2258-2261 (2258 ≈ 3497)

BKBh は、仏教の「律」に相当する白衣派聖典群のひとつである *Bṛhatkalpa* に対し Saṃghadāsa（5 ～ 6 世紀頃[27]）が著した韻文註である。BKBh 2257 は女性修行者の腋・陰部・乳房・腿などを見てしまうと、たとえ感官を制御している男性修行者でも迷妄〔業〕が燃え上がるとし[28]、2258 で件の 10 段階説の一覧を挙げ、2259-2261 でそれを詳説する：

cintā ya daṭṭhum icchai dīhaṃ nīsasai taha jaro dāho /
bhatta-aroyaga mucchā ummattŏ na yāṇaī maraṇaṃ //2258 ≈ 3497//[29]
paḍhame soyai vege daṭṭhuṃ taṃ icchaī biiyavege /
nīsasai taiyavege āruhai jaro cautthammi //2259//
ḍajjhai pancamavege chaṭṭhe bhattaṃ na royae vege /
sattamagammi ya mucchā aṭṭhamae hoi ummatto //2260//
navamĕ na yāṇai kiṃcī dasame pāṇehĩ muccaī maṇuso /
①物思い②見ようと欲する③長く息を吐く④苦悩⑤焼ける⑥食事が楽しくない⑦失神⑧正気を失う⑨認識しない⑩死（2258）。①第 1 の衝撃で

は憂える。②第 2 の衝撃では彼女を見ようと欲する。③第 3 の衝撃では嘆息する。④第 4〔の衝撃〕では苦悩が登ってくる（2259）。⑤第 5 の衝撃では〔四肢が〕焼ける。⑥第 6 の衝撃では食事を楽しまない。⑦第 7〔の衝撃〕では失神する。⑧第 8〔の衝撃〕では正気を失う（2260）。⑨第 9〔の衝撃〕では何も認識しない。⑩第 10〔の衝撃〕で男は諸気息に捨てられる（＝死ぬ）…。

4.3 Vīrabhadda 作 *Ārāhaṇāpaḍāyā* [ĀPV] 551-554

ĀPV は 1022 年に白衣派の Vīrabhadda が著した断食死マニュアルである。かつて議論した通り、[30] ĀPV は BhĀ の多大な影響下にあり、両文献間には幾多の平行関係が認められる。件の 10 段階説についてもそれは同様で、細かい差異を除けば内容は一致する：

āsīviseṇa daṭṭhassa huṃti vegā narassa satteva /
kāmabhuyaṃgamadaṭṭhassa huṃti veyā dasa duraṃtā //551//
paḍhame soyai vege daṭṭhuṃ taṃ icchae biiyavege /
nīsasai taiyavege āruhai jaro cautthammi //552//
ḍajjhai paṃcamavege aṃgaṃ chaṭṭhe na royae bhattaṃ /
mucchijjai sattamae ummatto hoi aṭṭhamae //553//
navame kiṃ pi na yāṇai dasame pāṇehiṃ muccai mayaṃdho /
saṃkappavaseṇa puṇo vegā tivvā ya maṃdā ya //554//
毒蛇に咬まれた男に 7 つの衝撃が生じるように、《情欲》という蛇に咬まれた者には悪い結末に至る 10 の衝撃が生じる（551）。①第 1 の衝撃では憂える。②第 2 の衝撃ではその〔女〕を見ようと欲する。③第 3 の衝撃では溜息をつく。④第 4〔の衝撃〕では苦悩が登ってくる（552）。⑤第 5 の衝撃では肢が焼かれる。⑥第 6〔の衝撃〕では食事を気に入らない。⑦第 7〔の衝撃〕では失神する。⑧第 8〔の衝撃〕では正気を失う（553）。⑨第 9〔の衝撃〕では何も認識しない。⑩第 10〔の衝撃〕では〔欲望と

いう〕酔いで目がくらみ諸気息に捨てられる（＝死ぬ）。また、妄想の強度に基づき諸々の衝撃は激しいものと穏やかなものとがある（554）。

4.4 Śubhacandra 作*Jñānārṇava* [JA] 11.28-32

JA は空衣派の Śubhacandra（11 世紀[31]）が著した、技巧的梵語を駆使した韻文作品であり、ジャイナ教的ヨーガ実践の解明をその中心的課題とする。10 段階説は不淫の掟を説く 11 章に登場し、BhĀ のそれと極めて近い内容を持つ。JA 研究は皆無に等しく、Śubhacandra の知的源泉については今後の本格的研究を俟つ必要があるが、少なくともこの箇所に限って言えば BhĀ の直接の影響下に作成された可能性を想定し得よう：

bhogidaṣṭasya jāyante vegāḥ saptaiva dehinaḥ /
smarabhogīndradaṣṭānāṃ daśa syus te mahābhayāḥ //28// tadyathā
prathame jāyate cintā dvitīye draṣṭum icchati /
syus tṛtīye 'tiniśvāsāś caturthe bhajate jvaram //29//
pañcame dahyate gātraṃ ṣaṣṭhe bhaktaṃ na rocate /
saptame syān mahāmūrcchā unmattatvam athāṣṭhame //30//
navame prāṇasaṃdeho daśame mucyate 'subhiḥ /
etair vegaiḥ samākrānto jīvas tattvaṃ na paśyati //31//
saṃkalpavaśatas tīrvrā vegā mandāś ca madhyamāḥ /
mohajvaraprakopena prabhavantīha dehinām //32//

肉体ある者が蛇に咬まれると、ちょうど 7 つの衝撃が生じる。性愛という大蛇に咬まれたものどもには、大いに恐ろしい 10〔の衝撃〕があり得る（28）。それはつまり ― ①第 1〔の衝撃〕では物思いが生じる。②第 2〔の衝撃〕では見たいと欲する。③第 3〔の衝撃〕では諸々の過剰な溜息があり得る。④第 4〔の衝撃〕では苦悩にあずかる（29）。⑤第 5〔の衝撃〕では身体が焼かれる。⑥第 6〔の衝撃〕では食事を喜ばない。⑦第 7〔の衝撃〕では大々的な失神が、そして⑧第 8〔の衝撃〕では正

気を失うことがあり得る（30）。⑨第 9〔の衝撃〕では命の危険があり、⑩第 10〔の衝撃〕で諸気息に捨てられる（＝死ぬ）。これらの衝撃に踏み込まれたジーヴァは真実を見ない（31）。強い・中間・穏やかな衝撃が、妄想の力ゆえに迷妄〔業〕という熱が活気づくことで、強度・中度・弱度の衝撃がこの世で肉体あるものたちに生じる（32）。

5. おわりに

最後に蛇足ではあるが、今まで列挙した諸文献の 10 段階説に何らかの関係性が見出せるか否かについて、BhĀ の 10 段階説を中心とした対応表を提示し、そこから窺われる若干の特徴を指摘することで、結論に代える。意味的には同じと考えられても、用いる語彙が異なる場合はアステリスクマークを付した（表2）。

ジャイナ教内部では (1) BhĀ, Agaḍadatta, BKBh, ĀPV, JA (1-1) Pc (2) DasN という 3 つの伝承に区分し得る。Pc は⑧⑨で独自項目を立てるが、蛇毒の 7 段階説と情欲の 10 段階説をセットで述べる点からして (1) と少なくとも同系統であることを疑う必要はなく、全くの孤立伝承と看做すよりは (1) の派生形、

（表2）10段階説対応表

BhĀ	Pc	Aga.	DasN	BKBh	ĀPV	JA	(a)	(b)	(c)	(d)
①	①*	①*	②*	①	①	①*	②	—	①	①④
②	②	②*	—	②	②	②	①	—	—	—
③	③	③	—	③	③	③	—	—	③	③
④	④	④	—	④	④	④	—	—	—	—
⑤	⑤	⑤	—	⑤	⑤	⑤	—	—	—	—
⑥	⑥	⑥	⑤*	⑥	⑥	⑥	—	⑥	⑥	—
⑦	⑨	⑦	—	⑦	⑦	⑦	⑨	—	—	—
⑧	—	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑦	⑨	⑧	—
⑨	—	⑨？	—	⑨	⑨	⑨？	—	⑧	—	—
⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	—	⑩

または Vimala による改変を蒙った (1) の亜種と理解するべきであろう。また、これらは①を śocati とする群（BhĀ, BKBh 2259, ĀPV) と cintā とする群（Pc, Agaḍadatta, BKBh (Nijjutti?) 2258, JA）、⑨を kiñcid na jānāti とする群（BhĀ, BKBh, ĀPV）と prāṇasaṃdeha とする群（Agaḍadatta, JA）に分かれるなど、更に細かい伝承系統を想定することも可能だが、基本的には BhĀ を代表する 10 段階説と DasN に説かれ PSU に引かれる 10 段階説とが基礎になったものと理解してよかろう。

BhĀ について言えば、この 10 段階説が白衣派聖典に存在しないので、白衣派聖典からの借用と見ることは難しい。また、ジャイナ教の 10 段階説と非ジャイナ教文献に見られるそれとの乖離は著しく、Śivārya が非ジャイナ教文献で既に存在した 10 段階説をそのまま借用した可能性も限りなく低い。対応関係を示すのは BKBh 2258 からで、完全な対応は BKBh 2259 以下である。伝統的年代説に依る限り、BhĀ と同時代の可能性がある（つまり Nijjutti の可能性がある）BKBh 2258 は兎も角、BKBh2259 以下の影響を BhĀ が受けたとは考え難い。Śivārya や Bhadrabāhu に設定される伝統的年代説からすれば、ジャイナ教の 10 段階説は最も古いものであって、これが純粋にジャイナ教内部で作成された概念である可能性も考慮する必要がある。そしてその作成（の少なくとも一端）を担ったのが Śivārya 本人だと考えることは、今のところ否定できない。

無論、そのような年代説や Śivārya の authorship こそが問題であって、その解明には今回行なったような調査を継続する必要がある。特にジャイナ教内部の問題としては、Nijjutti や Bhāsa と呼ばれる白衣派の韻文註釈群と BhĀ の記述との平行関係の調査が必要である。とりわけ、5 世紀以降の成立が想定される Bhāsa 群と BhĀ との対応関係の指摘は、BhĀ の成立問題を考える上で重要な指標かと考える。

【ジャイナ教一次文献及び略号】

ĀPV	Vīrabhadda's *Ārāhaṇāpaḍāyā.* ed. by PUṆYAVIJAYA & Amritlal Mohanlal Bhojak, Jaina-Āgama-Series No.17 (Part II).
BKBh	*Bṛhatkalpabhāṣya.* (1) ed. by W. B. BOLLÉE, Beiträge zur Südasienforschung181,1; (2) ed. by CATURVIJAYA & PUṆYAVIJAYA, Śrī Ātmānanda Jaina Grantharatnamālā 84（含Kṣemakīrti 註）
BhĀ	*Bhagavatī Ārādhanā.* ed. by KAILĀŚACANDRA, Jīvarāja Jaina Granthamālā Hindī vibhāga puṣpa 36.
DasCA	Agastyasiṃha's Cūrṇi on *Dasaveyāliya*. ed. by PUṆYAVIJAYA, Prakrit Text Society Series 17.
DasCJ	Jinadāsa's Cūrṇi on *Dasaveyāliya*. *Prasiddhyā Śrī Jinadāsagaṇimahattararacitā Śrīdaśavaikālikacūrṇiḥ*, Ratlam, 1933.
DasN	*Dasaveyāliyanijjutti.* ed. by W. B. BOLLÉE, Beiträge zur Südasienforschung 169.
DasH	Haribhadra's Commentary on *Dasaveyāliya*. ed. by DĪPARATNASĀGARA, Āgamasuttāṇi No.27.
JA	*Jñānārṇava*. ed. by Bālacandra Siddhānta ŚĀSTRĪ, Jīvarāj Jain Granthamālā Hindi Puṣpa No.35.
Pc	*Paumacariya.* ed. by Herman JACOBI / second edition revised by PUṆYAVIJAYA, Prakrit Text Society Series No.6.
PSU	*Pravacanasāroddhāra*, ed. by MUNICANDRAVIJAYA, Surat: Śrī Jaina śve. mū. tapāgaccha gopīpurā saṃgha, 1988.

［注］

1） 拙稿「*Bhagavatī Ārādhanā* 873-874」『中央学術研究所紀要』42, 2013, pp.58-72 を見よ。

2） kāmakadā itthikadā dosā asucittavuḍḍhasevā ya / saṃsaggīdosā vi ya karaṃti itthīsu veraggaṃ //876//

3） saṃkappaṃḍayajādeṇa rāgadosacalajamalajīheṇa / visayabilavāsiṇā radimuheṇa ciṃtādiroseṇa //884// kāmabhujageṇa daṭṭhā lajjāṇimmogadappadāḍheṇa / ṇāsaṃti ṇarā avasā aṇeyadukkhāvahaviheṇa //885//

4） 蛇毒の7段階に亘るvegaについては、インド古典医学文献では例えば *Suśrutasaṃhitā,* Kalpasthāna 4.39 や *Aṣṭāṅgahṛdaya,* Uttarasthāna 36.19ff. で詳説される（後者は、BhĀ886 に対する Āśādhara 註が引用する）。

5） jara (Skt. jvara) は「苦悩」とも物理的な「熱」とも理解可能である。ジャイナ教の用例に対する諸註釈は意味を決定する手掛かりにならない。後で挙げる INSLER

論文（p.313）は前者の意味と理解するが、INSLER がもうひとつの可能性として挙げる jara(ya) = jāgara 説（つまり「不眠」）は、語形変化の上からは異例であり受け入れ難い。

6） Śrī Devuduṭṭā ŚĀSTRĪ (ed.), *The Kāmasūtra of Śrī Vātsyāyana Muni with the Jayamaṅgalā Sanskrit Commentary of Śrī Yaśodhara*, The Kashi Sanskrit Seriers 29, Varanasi, 1992 (4th edition).

7） yadā tu sthānāt sthānāntaraṃ kāmaṃ pratipadyamānaṃ paśyet tadātmaśarīropaghātatrāṇārthaṃ paraparigrahān abhyupagacchet.

8） Yaśodhara の「女を見た男の両目が、性交への欲望を特性とする情欲のせいですぐに潤む」（striyaṃ dṛṣṭavataḥ saṃyogecchālakṣaṇāt kāmād anantaraṃ dṛśau snigdhe bhavataḥ）という解釈を踏まえて訳した。

9） Stanley INSLER, "Les dix étapes de l'amour (*daśa kāmāvasthāḥ*) dans la littérature indienne," *Bulletin d'Etudes Indiennes* 6, 1988, pp.307-328.

10） これはナラに焦がれるダマヤンティーの描写を INSLER が再構成したもので、実際にはこの順序で列挙されない。Poona 批判版で 3.51.2-4 に相当する。

11） これは囚われの身のシーターの描写を INSLER が再構成したもので、実際にはこの順序で列挙されない。INSLER は Bombay 版に拠るが、Baroda 批判版では 5.13.18ab,21ab,22,25-26 及び 5.14.1-3 にあたる。また両版の読みは幾つか相違するが、当該の問題に限ると INSLER が第 6 に配する項目が Baroda 批判版では parimlāna になる（5.13.21b）。

12） INSLER は p.311 の一覧ではこの読みを挙げるが、Bombay 版でこの項目に相当するのは parikṣīṇa である（但し、前註を見よ）。

13） Cf. K.R.CHANDRA, "New Light on the Date of the Paümacariyam," *Journal of the Oriental Institute* (Baroda) 13, 1964, pp.378-386.

14） 原文では evaṃ vihā と 2 語扱いだが訂正した。

15） INSLER（p.322）は jāgara に等しいと見て l'insomnie と訳すが、採らない。

16） INSLER（p.323）は unmādayati に等しいと見て étape on manifeste la folie と訳すが、採らない。

17） Hermann JACOBI, *Ausgewählte Erzählungen in Mâhârâshṭrī*, Leipzig, 1886.

18） 年代順に、Nijjutti、Cūrṇi（7 世紀？）、Śāntisūri 註（11 世紀前半）、Nemicandra 註（1072 年作）、Jñānasāgara 註（1384 年作）、Jayakīrti 註（1426 年作）、Kamalasaṃyama 註（1487 or 97 年作）、Bhāvavijaya 註（1632 年作）、Lakṣmīvallabha 註（1688 年作）の計 9 註釈。Utt の註釈は未校訂のものも含め少なくとも 60 種は存在するため、今後別の註釈中に見出し得る可能性は残されている。

19） Kristi L. WILEY, *The A to Z of Jainism*, Lanham/Toronto/Plymouth, 2009, pp.50-52 を見よ。

20） kāmo cauvīsaviho saṃpatto khalu tahā asaṃpatto / saṃpatto cauddasahā dasahā puṇa hoy asaṃpatto //

21） 彼が Utt 註釈者の Nemicandra と同一人物か否かについては議論が分かれる。Karl H. Potter & Piotr Balcerowicz (eds.), *Encyclopedia of Indian Philosophies Volume XIV: Jain Philosophy (Part II)*, Delhi, 2013, pp.266-269 を見よ。

22） 諸註釈は、彼女を求め逢いたいと思う欲求という意味で理解する：DasCA (p.142): tehiṃ rūvātīhiṃ akkhitto tam eva kaṃkhati.; DasCJ (213.10): tehiṃ rūvādīhiṃ akkhitto tam eva kaṃkhai kahaṃ nāma mama tīe saha samāgamo hojja.; DasH (p.175): śraddhā tatsaṃgamābhilāṣaḥ. 欲求という意味の śraddhā が性的な関連で使用される例については、Minoru Hara, “Śraddhā in the Sense of Desire,” *Asiatische Studien* 46-1, 1992, pp.180-194, esp., pp.187-188 を見よ。

23） 諸註釈は、女性と離別すると食欲が失せるという方向で理解し、この限りでは DasN の⑤と BhĀ の⑥は相応する：DasCA (p.142): jīse ya vippayoe bhattāe ṇābhilasati vikkavībhūto.; DasCJ (213.11f.): tīe vippayoge vikkavī bhavati sogābhibhūyo ya jahociyāṇi āhārācchāyaṇādīṇi ṇābhilasai.; DasH (p.175): tacchokātirekeṇāhārādiṣv api nirapekṣatā.

24） DasCA と DasCJ はこれを活動の放棄という方向で理解するのに対し、DasH は女のためだけにいかなる活動にも手を出す、と理解する：DasCA (p.142): savvāraṃbhapariccāyo saddātisu ya tavvirahiesu aparitoso.; DasCJ (213.13): savvāraṃbhapavattaṇapariccāgo abhinivesenaṃ.; DasH (p.175): tadartham eva sarvārambheṣv api pravartanam.

25） 3 註釈とも tadbhāvanā に等しいとし、女を思いながら柱などを抱擁し、ただの空間を掴むことなどを指すとする。これを踏まえると「〔実際にはそこに存在しない〕女を〔まるでそこにいるように〕生じ〔させること〕」か：DasCA (p.142): tām iti(?) maṇṇamāṇo thaṃbhāti uvagūhati āgāsāti vā.; DasCJ (213.14-214.1): rāgavasagattaṇeṇa tam itthiyaṃ maṇṇamāṇo thaṃbhādīṇi uvagūhai āyāsovaggahaṃ vā karei.; DasH (p.175): stambhādīnām api tadbuddhyāliṅganādiceṣṭeti.

26） DasCA の引く DasN では、最後 2 つの順が逆転する。DasCJ は DasN の全文を引かないが、註解は⑩→⑨の順に行なわれ（213.14-214.1）、故に DasCJ も DasCA と同一伝承の DasN を見ていたと思われる。

27） Mohanlal Mehta, *Jain sāhitya kā bṛhat itihās bhāg 3*, Varanasi, 1967, p.123 を参照せよ。

28） tāsiṃ kakkhantaragujjhadesakucaudaraūru-m-āīe / niggahiyaindiyassa vi daṭṭhuṃ moho samujjalai // BKBh2256 への Kṣemakīrti 註（p.642）によると、排泄場所に女性修行者が赴き、男性修行者がその場に到来しつつあるのを目撃するケースが想定されている（kācit saṃyatī vicārabhūmau prāptā saṃyatam āgacchantaṃ dṛṣṭvā ...）

29） Kṣemakīrti（p.642）は BKBh2258 を Nijjutti と 見 做 す（etām eva niryuktigāthāṃ vivṛṇoti ...）。そうであれば BKBh2258 の作者は DasN と同一人物の可能性があるが、DasN と BKBh の 10 段階説は大きく齟齬し、問題が残る。

30） 拙稿 “Vīrabhadda’s *Ārāhaṇāpaḍāyā*: A Preliminary Report,”『印度学仏教学研究』60-3, 2012, pp.1161-1168 を参照されたい。

31） JA 校訂本の prastāvanā での Bālacandra ŚĀSTRĪ による議論（pp.17-20）を見よ。

（平成 24 ～ 26 年度科学研究費補助金（若手Ｂ）による研究成果の一部）

（大谷大学真宗総合研究所特別研究員）

SUMMARY

Daśa kāmāvasthāḥ in the *Bhagavatī Ārādhanā*

Yutaka Kawasaki

The *Bhagavatī Ārādhanā* [BhĀ] of Jain monk Śivārya (1-2nd century) is regarded as the oldest and the most comprehensive treatise which deals with the practice of fasting unto death (*ārādhanā*). Despite the importance of BhĀ for the study of the historical aspect of *ārādhanā*-practice, however, little study on this treatise has been performed so far. In this paper, as a preliminary report for the comprehensive study of BhĀ in future, I provide an edition and Japanese translation of BhĀ 886-889, where Śivārya tells about a list of ten *vega*s or shocks which affect one who is suffesed with lust. Then, reffering to the study of Stanley Insler who discussed the development of *daśa kāmāvasthāḥ* or a list of ten states which affect one who is love stricken seen in the rhetorical treatises (*alaṅkāraśāstra*) and erotic manuals (*kāmaśāstra*), I make some remarks comparing the same concept which is found in other Jain texts, that is, Vimala's *Paumacariya*, Nemcandra's commentary on the *Uttarajjhāyā*, *Dasaveyāliyanijjutti*, Nemicandra's *Pravacanasāroddhāra*, *Bṛhatkalpabhāṣya,* Vīrabhadda's *Ārāhaṇāpaḍāyā,* and Śubhacandra' *Jñānārṇava,* respectively.